中国21 Vol. 39 2014. 1 ISSN 1342-8241
愛知大学現代中国学会 編 東方書店

特集 ナショナリズムと歴史認識

対談

日韓朝のナショナリズム
ブライアン・マイヤース×河辺一郎

論説

倒錯した幻想と日中の民際対立　田島英一

日米保守派の歴史認識　河辺一郎

「暴力幻想」と悪循環
―安倍、イデオロギーそして日中関係の将来　マシュー・ペニー

国民を渇望する
―一九八〇～一九九〇年代台湾民族主義の文化政治　蕭阿勤

特別寄稿

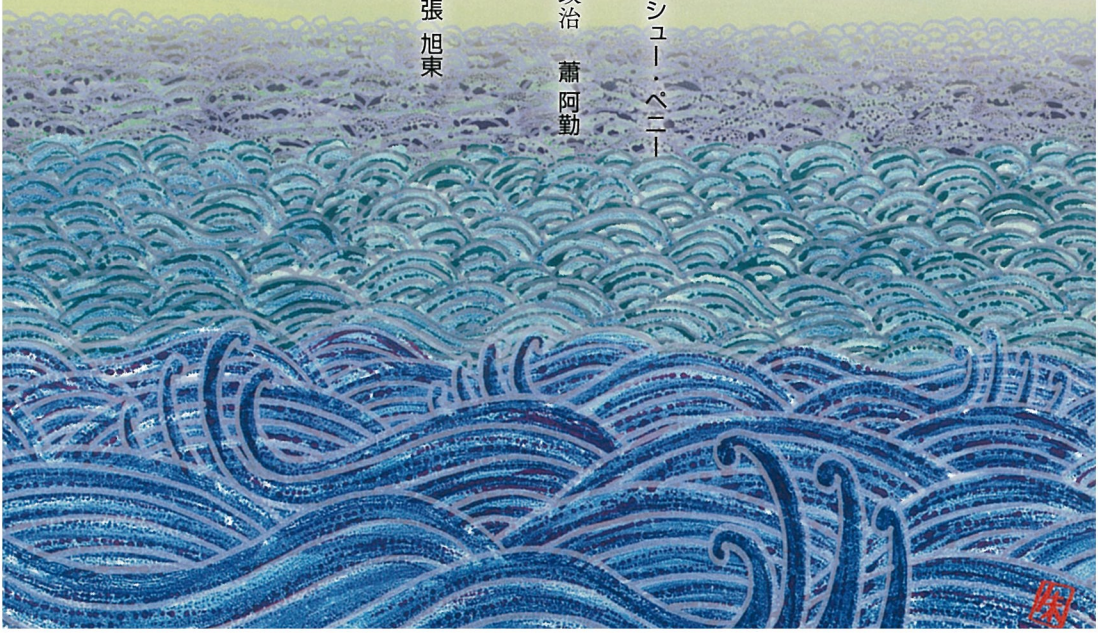
莫言『酒国』を読む
―中国の「いま」を描くデモーニック・リアリズム　張旭東

一般論説

光復後初期の台湾における文化再建
―楊逵の作品改訂を例として　豊田周子

紅衛兵世代における読書動向について
―文化大革命以前を中心に　中津俊樹

周超／村上享二／上野稔弘／好並晶／小笠原淳
楊韜／樋泉克夫／野崎哲／楊海英



国民を渇望する

――一九八〇～一九九〇年代台湾民族主義の文化政治――

蕭　阿勤
（訳＝倉本知明）

●●●●●

一九七〇年代の台湾社会は、政治上では「現実への回帰」が進み、一方文化上では「郷土への回帰」が進んでいた。当時、こうした既存の体制に挑んだのは、本省人外省人を問わず、戦後に成長した若い知識人たちであった。彼らは一九七〇年代初期における台湾外交の挫折に刺激を受けて覚醒した世代で、国民党統治下で産み出された「亡命」意識とそこから派生した諸々の政治体制や文化状態を批判したことから、「現実回帰の世代」と呼ばれてきた。彼らは依然として中国民族主義の視野や構造の下で郷土を発見し、台湾を理解してきたが、同時に体制内部の革新と民主化にも理解を示してきた。[1] 彼らが追求したものとは「脱亡命」の政治と文化だった。

一九七九年末、高雄で起こった美麗島事件は、台湾社会が一九七〇年代から一九八〇年代へ方向転換する際の最も重要な要素となった。一九八〇年代以降、政治の上では本省人を中心とする「党外勢力」と民主進歩党をリーダーとする反対運動が積極的に台湾意識を宣揚することによって、台湾民族主義運動を大きく発展させてきた。一九七〇年代における現実回帰世代の中でも、若い本省人の世代を中心に郷土文学が提唱され、日本統治時代の台湾新文学が掘り起こされ、また党外人士による台湾史への探究などが行われた。こうした動きは後に台湾意識や台湾民族主義が発生する下地となり、またその基礎を築いてきた。一九七〇年代におけるこうした基礎の上に、一九八〇年代には台湾民族主義の「文化政治」（cultural politics）が急速に発展し、そこで「台湾の書き直し」が図られ、台湾社会に対し

て大きな影響を生み出すこととなった。[2]

一九八八年、本省籍である李登輝が、蔣経国の後を継いで国民党主席及び総統に就任した。国民党の政策決定に携わることのできる階層の本省籍の総数は、少しずつ外省籍のそれを超え始めていた。一九九一年には、中国大陸で選出された第一期非定期改選の中央民意代表が職権の行使を終了させられ、国会は全面的に改選された。一九九〇年代初期、国民党内部における反李登輝の「非主流派」と親李登輝の「主流派」が闘争を続けた挙句、国民党は権勢を失っていった。国民党内部における若い外省人を中心とする「新国民党連線」の人々は、李登輝の台湾独立の動きに疑問を抱き、彼に反対してきた。一九九三年、彼らは「新党」を結成し、民進党やそれを支持する台湾民族主義者たちの間で激しい衝突を繰り返すこととなった。一九九六年、台湾は戦後初となる民意による総統選挙を実施、当時国民党の候補者であった李登輝が過半数の票を獲得して総統職に再任された。こうした政治状況の変化の下で、過去に国民党の権威統治下で教化され、また中国民族主義の歴史叙述によって生み出された集団記憶や文化シンボルなどは、国家の文化教育政策と公共領域における文化論述の中で重大な挑戦と批判を受けることとなった。

台湾の現代史において、一九八〇年代、一九九〇年代は台湾政治及び文化の「本土化」「台湾化」のキー・タームとされている。本省人を中心に、国民党統治体制に挑んだ多くの人々は、一九七〇年代における「脱亡命化」の目標だけに止まらず、さらに一歩踏み込んだ「脱植民地化」の政治と文化を追求してきた。文化転換の視点から見て、このおよそ二〇年間は台湾民族主義が文化界において最も普及発展した時期であり、また脱植民地の文化再建の最も盛んな時期でもあった。台湾文化の「主体性」を追求し、主体性を持った台湾文化などの理念を建設する、所謂「台湾文化民族主義」(Taiwanese cultural nationalism) は、少数の人々によって提唱された後、徐々に社会全般に広い影響を持ち始め、台湾政治の転換と相互に影響を与え合いながら、台湾の文化様相を大きく変えていった。このおよそ二〇年間にわたる歳月の中で、台湾民族主義が文化領域に与えた変化の中でも最も顕著で注目に値したのは、文学、言語、歴史の三つの領域であった。なかでも台湾文学の成立は、本土言語運動の登場や台湾史観の発展など、文化の本土化や台湾化にとって率先して行われた課題であり、また台湾民族主義の文化政治にとって非常に重要な領域であった。一九八〇年から一九九〇年代におけるこうした文化政治状況の変化は、現代台湾における驚くべき歴史の一コマである。目下の台湾は依然としてこうした変化から大きな影響を受けている。その意味でも、現在の台湾を理解するためには我々はこの時期における過去の歴史を理解する必

要がある。

民族文学と民族文化の確立

美麗島事件は、政治における反対運動を激化させただけではなく、多くの本省籍の文学者たちの政治意識を呼び起こすこととなった。一九六四年に創設された雑誌『台湾文芸』と詩刊『笠』を中心に集結した本省籍の作家と評論家たちは、ここにおいて重要な役割を演じている。一九七八年初頭、郷土文学論争が収束に向かって間もなく、郷土文学の主要な作家であった王拓と楊青矗は、ペンを捨てて政治運動にその身を投じた。この二名は一九七八年末に中央民意代表の増員枠における党外候補者として共に名を連ねたが、同年アメリカが突然台湾との国交を断絶したことによって選挙は中止となった。王拓と楊青矗はその後、党外雑誌である『美麗島』の団体に加入するが、美麗島事件への関与から投獄されてしまった。この事件は『笠』と『台湾文芸』の作家たちに深い影響を与えることとなった。彼らの多く、例えば鍾肇政、李喬、宋沢莱らは、美麗島事件が彼らの政治意識を覚醒させたと主張し、それが国民党統治の独裁的性格を認識させるきっかけとなったと語った。彼ら三人はちょうど戦後第一、第二、第三世代を代表する本省籍の作家であり、美麗島事件の影響を深く受けてきた。そのことは「笠詩社」の主要な詩人たちにとっても同様で、鄭炯明や李敏勇などといった詩人も、美麗島事件の影響を大きく受けることとなった。

美麗島事件は、『笠』や『台湾文芸』の作家たちに、二・二八事件の記憶や反共戒厳体制下における社会生活、ナショナル・アイデンティティの問題といった敏感な社会政治問題と触れあう機会を生み出した。一九八〇年代初期から、これらの小説家や詩人たちは、明に暗に国民党による統治に抗議してきた。まさに、当時『台湾文芸』の社長であった陳永興が指摘するように、小説家や詩人たちは党外人士たちの国民党に対する挑戦を激励として、『台湾文芸』を「過去二〇年に比べて大きな進展があった。……書けないテーマなどないし、刊行できない作品などない」[3]ものにしようとしたのだった。笠詩社と『台湾文芸』は、「本社同人」としてその名を連ね、社務委員、編集委員、作者グループとその多くが本省籍の人々によって構成され、二つの刊行物に登場する作家の作品における抗議の姿勢には、明らかにエスニックな政治意識が含まれていた。一九八〇年代中葉、この二つの作家グループは、党外人士たちと公に親密な関係を築き始めることとなる。王拓と楊青矗は、一九八三年一二月と一九八四年一一月に相次いで出所、共に『台湾文芸』に加入してその同人となった。一九八二年初めには、笠詩社と『台湾文芸』の三人の古参メ

ンバー、鄭炯明、曾貴海、陳坤崙が高雄で雑誌『文学界』（一九八二～一九八九年）を創刊する。一九八〇年代、この新たな文学刊行物と『笠』及び『台湾文芸』は、本省籍の作家や文芸評論家たちが「台湾文学」概念を構築する際の主要な場となっていったのだった。

笠詩社と『台湾文芸』のメンバー、また彼ら自身の作品が政治的な主張を持つようになって、「台湾文学」の定義をめぐるテーマはますます重要なものとなっていった。その執筆生活が日本植民地統治期から戦後にまで跨る古参の本省籍作家である葉石濤は、かつて一九七七年の郷土文学論争の時期に発表した「台湾郷土文学史序論」において、台湾郷土文学は台湾意識に基づいて書かれた作品であるべきだと指摘した。当時、彼のこうした観点は同じく本省籍の作家で、しかし強烈な中国人アイデンティティを持つ陳映真から批判を受けた。しかし、一九八〇年代中葉、『台湾文芸』と緊密な関係にあった若い世代の評論家、高天生、彭瑞金、陳芳明らは、葉石濤のこうした考え方を引き継いでいった。党外政治の反対運動が激しさを増していく情勢の下で、彼らの文学評論は「台湾文学」概念の確立を追求する際の重要な役割を演じてきた。葉石濤の初期の考え方と比べて、彼らの論述は台湾文学の「脱中国化」がより鮮明に打ち出されている傾向があった。

高天生ら『台湾文芸』の若い世代のメンバーたちは、台湾文学の新たな定義付けを所謂「辺境文学」といった呼称への批判から始めることとした。一九八一年一月、本省籍の著名な評論家で、当時「中国時報」文芸チームの主任を務めていた詹宏志は、新聞小説の受賞作に関する議論の中で、次のように問いかけたのだった。「もしも三百年後、ある人が中国文学史の末尾に、百字ほどでこの三〇年来の我々の活動について述べるとするなら、彼は我々をどのように形容し、またそこにどういった名前をあげるのであろうか？」この評論は、台湾の文学作品が将来的に「辺境文学」の範疇に貶められることによって、戦後台湾におけるあらゆる文学創作が徒労に終わるかもしれないことを指摘するものであった。[4] 詹宏志のこうした観点はさっそく高天生の批評を引き起こした。葉石濤と考え方の近かった高天生は、「台湾文学は中国文学の支流である」という考え方を否定してはいなかった。しかし、彼は台湾文学の特殊な歴史的な発展とその性格から、それを一種独特の伝統を持ったものとして捉えるべきだと強調してきたのだった。台湾の作家の作品を判定するには、台湾文学の持つ歴史的な観点に基づく必要があり、中国文学の観点から見るべきではないと主張した。[5] 彭瑞金は、作家が意識の上で台湾という土地を認識し、そこに暮らす人民を気にかけ、その作品が誠実に人民の生活における歴史と現実を反映してこの土地に根付いているものならば、それは台湾文学と呼ぶこ

とができると主張した。彼はこうした「検査網」、即ち検査あるいは選定の基準こそが、「台湾文学」の「本土化」の特質であり、本土化が台湾文学建設の礎となるための最も重要な課題であると考えたのだった。彭瑞金は、こうした精神的特質の存在によって、「三百年来、オランダ・鄭成功時代から続く全ての台湾文学作品」を選定することができると信じ、台湾文学が一個の独立した完全な文学潮流の中にあること、即ち「「台湾文学」の伝承は、我々が詩や歌を持つ民族であり、ここから我々は自分たち自身の文学を持っている民族であるといった自信を探し出すことができる」[6]ことを証明しようとしたのだった。宋冬陽のペンネームで『台湾文芸』に「現段階における台湾文学本土化の問題」のテーマで一文を寄稿した陳芳明に至っては、葉石濤と陳映真が郷土文学論争の期間に提起した問題を改めて検討したが、そこでもやはり両者が重視した観点は大きく異なっていた。彼は葉石濤の「台湾（郷土）文学」の概念は健全な「台湾意識」に基づいているが、陳映真の「台湾における中国文学」の概念は現実にそぐわない「中国意識」を反映しており、両者は並び立つものではないとした。陳芳明は台湾を認識するあらゆる作家たちは、全力で台湾文学の「本土化」[7]と「自主性」を追求するべきだと主張したのだった。

この期間における政治的な変化は、台湾文学の定義を激しく揺さぶってきたが、李喬が提起したものがその中でも代表的なものといえるであろう。葉石濤と彭瑞金の見解を引用しつつ、李喬はこの問題を次のように定義している。

「所謂台湾文学とは、台湾人の立場に立って、台湾経験を描いた文学である」

所謂「台湾人の立場」とは、台湾という特定の時間と空間に立つことを指しており、それは広範な民衆の立場でもある。それはまた同情であり、アイデンティティであり、彼らの苦難や不幸な境遇、希望、それに自由や民主を追求して闘う、そういった立場でもある。こうした立場は、先住者か後住者か、あるいは省籍などといった文化、政治、経済などの要素とも関わりが無い。所謂「台湾経験」とは、この四百年来、大自然と闘い、あるいは共に過ごした経験であり、反封建、反迫害の経験であり、また政治の植民地化、経済の植民地化に対する反対であり、民主化や自由化を目指して努力してきた経験である。[8]

『笠』と『台湾文芸』のメンバーたちが上述したような方法で台湾文学を定義しようとした際、彼らは同時に台湾人を異なった外来政権によって抑圧・統治されてきた被害者として描き出し、また清朝から遺棄された孤児とみなした。彼らにとって、『台湾文芸』の創設人である呉濁流が一九四五年に書き上げた小説『アジアの孤児』は、台湾人

に一種の啓示を与えるものであった。その啓示とは即ち彼らは中国人ではなく、台湾人であることを覚醒すべきであり、また孤児のような立場にある台湾人たちは自らに自信を持たなければならないということにあった。台湾人の歴史経験と集合的記憶を、外省人やより広範な中国人のそれと区別するために、『笠』と『台湾文芸』のメンバーたちは日本植民地統治時代の重要性について強調し始めた。こうして植民地化された歴史は一種の「資産」となり、国民党がそれまで教化宣伝してきた「負債」の汚名は過去のものとなっていった。彼らは植民地統治と反植民地運動の特殊な歴史経験が台湾文学にそれまでの漢民族にはなかった特質を付与し、中国文学の支流から脱して独特の伝統を生み出すことを信じたのだった。

総括してみれば、一九八〇年代の前半、『笠』と『台湾文芸』メンバーを中心とする本省籍の文学人士たちは、一心に台湾文学の「脱中国化」に専念してきた。彼らの持つ核心的な関心とは、現実へ介入するといった台湾文学の社会精神や抵抗意識、そしてそうした本土化の特質を強調することにあり、台湾文学をとりわけ日本植民地統治時代以来の台湾（本省）人の文学的発展と見なすことによって、それを中国文学とは違った、独特の伝統を持ったものとして解釈することにあった。

一九八〇年代後半以降、『笠』と『台湾文芸』のメンバーは、台湾文学の「民族化」に尽力してきた。即ち、台湾文学に一種の民族的な性格を付与しようとしたのであり、またそれを「台湾民族」独特の文学的伝統へと変えようとしたのであった。しかも、この伝統が指すところとは一九八〇年代前半に唱えられた台湾文学の概念よりもさらに広範で、日本植民地時代以前における各エスニシティ集団の文学的表現までをも包括するものであった。そこにおいて、台湾文学は「台湾民族」による文学と見なされたのである。台湾独立を支持する作家と文芸批評家たちによる台湾文学に関する論述における政治意識とその主張は、ここにおいてさらに前進することとなる。こうした文学理念の急進化は、一九八六年末以降の政治的変遷に従って明らかになっていった。一九八六年九月には、戦後台湾における初の反対野党である民進党が成立、それまで続いてきた政治的なコントロールは弛み続け、台湾独立運動は急速に発展を続けていった。また、国民党統治エリートの「台湾化」や中台間の相互交流の増大などが台湾民族主義者たちの憂慮を深めていき、そうした要因が重なったこともあって、台湾文学の民族化論述が発展していく結果となったのであった。一九八〇年から一九九〇年代にかけて、葉石濤が出版した『台湾文学史綱』（一九八七年）と彭瑞金の『台湾新文学運動四〇年』（一九九一年）は、笠詩社と『台湾文芸』のメンバーによる台湾文学論述が「脱中国化」から

「（台湾）民族化」へと至った典型的な例だといえる。

民進党の成立以降、笠詩社と『台湾文芸』のメンバーたちは、さらに一歩踏み込んだ形で政治運動に参加、台湾民族主義発展の一翼を担った。民進党成立後しばらくして、この二つの団体の主要なメンバーは、台湾意識を鮮明に持った文化エリートたちを組織する形で、一九八七年二月に「台湾ペンクラブ」を設立、楊青矗を初代会長として、詩人、小説家、散文家、文芸批評家、画家、音楽家など、およそ一三〇名の会員を有する組織を築いた。笠詩社と『台湾文芸』のメンバーは、台湾ペンクラブの主要会員か幹部となって、『台湾文芸』もまたこの新団体の機関刊行物となった。その「成立宣言」では、「文化運動の一切は改革のルーツである」ことが強調され、また「全面的な文化改革」が要求され、これを以って社会を改善するとした。[9] 台湾独立運動が急速に推進された一九八〇年代後半、台湾民族主義の文化論述は大きく発展してゆき、笠詩社と『台湾文芸』の作家と文芸評論家たちは、その主要な推進者となっていった。大局的に見れば、これらの文化論述の大きな特色は上述した文学方面の動向と類似している。つまり、台湾文化の「脱中国化」の後に「民族化」が進められたことにある。『台湾新文化』と『新文化』、この二つの雑誌（これらは共に民進党の中心的指導者である謝長延が社長を務めて発行していた）の創刊は、こうした動きが高度に政治的意図を孕んだ文化論述の風潮であったことを意味しており、この新たな刊行物もまた『台湾文芸』と同様に、台湾民族主義者たちが自らの文化論述を宣伝する際の主要なパイプとして活用されたのであった。

こうした文化論述は、いくつかの重要な特色を備えていた。第一に、台湾文化と中国文化という二項対立を生み出した点があげられる。そこでは中国文化は硬直的で、封建的、反動的、抑圧的であって、土地に縛られたものとして認識され、一方の台湾文化は柔軟性に富み、現代的、進歩的、民主的で、大海に向かって広がっていくものとして認識された。そして第二の特色として、台湾文化の多元性の起源が強調された点があげられる。台湾の歴史における非漢人、原住民たちの文化はこうした状況の下でますます強調され、台湾の持つ特殊な文化要素の一環として、彼ら原住民たちを漢人による中国文化の中に組み込むべきではないとされた。また、オランダ人による植民地化、スペイン人による占領、日本人による統治なども、台湾文化の特殊性を主張する重要なソースとなっていった。第三に、中国文化と台湾文化の中心と周辺という歴史上の関係性がひっくり返されたことがあげられる。中国文化は台湾文化の一部分と見なされ、しかも政治的抑圧や社会的停滞、道徳の喪失などといった社会の負の部分は、「邪悪な」中国文化の影響のなすところとされ、台湾人の心に巣食う中国意識

を一掃することは、台湾新文化を創造するための先決条件とみなされたのだった。第四に、「文化の主体性」といった言葉が、台湾民族主義者たちが絶えず口にするキーワードとなっていったことがあげられる。彼らはここにきて繰り返し、熱を込めて「台湾文化の主体性の建設」、あるいは「主体的な台湾の創造」をアピールするようになっていった。

一九九〇年代、より自由化された政治状況の中で、台湾文化民族主義者たちの論述は、台湾文化の「民族化」へ向かって進んでいった。すでに停刊していた雑誌『文学界』の創設人、鄭炯明、曾貴海、陳坤崙の三人は、一九九一年一二月に高雄で再び『文学台湾』（一九九一年～）を創刊した。葉石濤、陳千武、鍾肇政、李喬、李敏勇、陳芳明、彭瑞金など、笠詩社と『台湾文芸』の重要メンバーたちは、『文学台湾』の顧問や編集委員会を担当した。こうして、『文学台湾』と『笠』、『台湾文芸』は、台湾文化民族主義者たちが提唱する台湾民族文学概念の主要な拠点となった。

笠詩社と『台湾文芸』メンバーは、主に二つの面において台湾文学の「民族化」に尽力した。第一に、台湾現代文学の発展が台湾民族の独特なアイデンティティ、あるいは国家アイデンティティの歴史的過程を追求するものとして新たに解釈されたことにある。しかも、こうした民族・国家アイデンティティの追求が、日本植民地統治下の一九二〇年代以降、全ての現代台湾文学の基本テーマとして見なされることとなった。つまり、台湾文学の発展は、最初から「台湾民族の構築」に向けて進展してきたものとして理解されたのだった。第二に、彼らが台湾文学の多元性の起源と多民族的な性格を強調し始めたことがあげられる。台湾文化が多元的な起源を持つものとして描かれたように、台湾文学もまた、その多様なルーツが主張され始めたのである。少なくともそこには(1)原住民文学（伝統や神話、伝説、民謡や近年における原住民の文学作品など）、(2)漢人民間文学（福佬系や客家系住民の民間物語、俚諺、芝居など）、(3)漢人古典文学（明・清朝以来の伝統詩文など）、(4)日本植民地統治時期の新文学（台湾人と在台日本人の作品など）、(5)戦後文学（本省人、外省人の各文学作品[10]）などが含まれていた。これらの全てが台湾民族文学と見なされ、しかもその中でも原住民文学と漢人民間文学はそれまでにないほど重視されることとなった。

民族言語の創建

言語は常に民族主義者たちにとって、文化に関わる核心的な議題であった。台湾の民族主義が顕著な進展を見せた一九八〇年代もまた、言語の問題は避けて通ることのでき

ない課題であった。民進党成立前の一九八〇年代前半、とりわけ選挙期間において、反対運動を展開した党外人士たちは言語を民衆の支持を取り付ける上での有効な方法と見なしていた。たとえ国民党の候補者でも、本省籍だけではなく外省籍の人間も含めて、候補者たちは台湾語を使用することによって選挙民たちの心を揺さぶってきた。党外人士たちの間では、台湾語を使用することは政治的な不満をより明確に表明し、また所属するエスニシティに対する忠誠心の表れとされてきた。この時期から、党外の反対運動家たちは「台湾意識」を提唱し、台湾の言語問題にも言及し始めた。とりわけ、学校教育における「国語偏重」政策に焦点をあて、また放送やテレビ中継における台湾語の使用制限及び立案中の「言語法」の草案についても批判を繰り広げた。しかし、この期間における党外勢力による国民党の言語政策への批判は、未だ社会全体の大きな注目を集めるまでには至らなかった。

一九八〇年代後半には、福佬エスニシティの色彩を帯びた台湾民族主義が急速に発展した。民進党が指導する反対運動は、その指導者と支持者の大部分が本省人であり、とりわけ福佬系住民を中心としていた。そのため、民進党の会議や集会、あるいは街頭での抗議活動などでは台湾語がその主要な使用言語となった。一九八七年になると、言語の問題は社会大衆の大きな関心を集め始めた。同年三月、民進党立法委員の朱高正は、立法院において台湾語で質疑応答して、国民党内の外省籍の大臣や高齢の万年議員たちに大いに恥をかかせた。この件はある事実を暴露する結果となった。つまり、外省籍の政治エリートたちはたとえ台湾で四〇年近く生活しても、現地の主要言語であるはずの台湾語を聞きとれないばかりではなく、まるでそれを学ぶ意志がなかったということだ。朱高正のこうした方法は、国民党・民進党両党の立法委員たちの間に深刻な衝突を引き起こし、また社会全般に言語問題と国語政策に関する広範な議論を巻き起こすこととなった。

国語政策に対する批判が日に日に高まっていく中、一九八七年八月、台湾省政府教育庁は台湾各地の小学校、中学校、高校に対して、校内で本土言語を使用した学生に対する懲罰行為を取り止めるように通達した。同年末、全国に放送局を持つ三つのテレビ局が、それまで毎日短時間だけ放送されていた台湾語の番組以外にも、二〇分間の台湾語のニュース番組を放送することを決めた。さらにその二年後には、その内の一局（台湾電視公司）が、毎週一回、三〇分間の客家語の番組を放送することを決めた。一九九〇年二月には、南部にある国立成功大学が台湾語の授業を開設、これは公の教育システム内部における初の試みであった。同年五月、行政院ニュース局はテレビ番組における本土言語の使用制限を取り消すことを正式に発表した。

これと並行して、民進党は小学校と中学校におけるバイリンガル教育の推進に努めてきた。一九八九年、地方選挙において民進党の候補者たちは、バイリンガル教育に関する計画をマニュフェストに追加した。その中で当選した六名は、彼らが政務を執る市町村の小中学校において、台湾語、客家語、原住民言語を含んだ「母語教育」を開設した。しかし、国民党が管理する市町村の議会ではこうした教育関連予算はしばしば削られてきた。しかも、本土言語には基準となるような音声記号や筆記システムが未だ十分に完備されておらず、また教育内容に見合った教師や教材を探すこともままならなかった。しかし、こうした問題を多々はらみつつも、こうした言語教育計画は一九九〇年代初期に依然として民進党施政下の市町村で実施されていった。

政府の本土言語に対する管理が弛んでいくのに従って、また野党によるバイリンガル教育提唱の影響から、一九八〇年代末以降の台湾では本土言語の復興現象が現れた。とりわけ、福佬系住民による台湾語劇や映画などが次々と現れ、台湾語の歌が流行し、多くの大学では台湾語や客家語のサークルが作られ、大量の台湾語辞典、雑誌や語学専門書、論文などが陸続と出版されていった。

台湾社会に溢れた台湾語や台湾語教育、台湾語研究などといった言語に対する濃厚な関心は、しかしながら言語問題に関心を抱く民族主義者たちからすれば、まだまだ満足できるものではなかった。一九八〇年代後半から、多くの台湾民族主義者たちは本土言語の復興と記述システムの創造に力を注いできた。福佬人たちによって台湾民族主義が指導されたために、こうした言語に関する行動と労力の重点は主に台湾語の上に注がれてきた。

言語問題に関心を持つ台湾民族主義者たちは、政府が台湾語を「方言」と誤って定義することを批判してきた。彼らは戦後長らく政府の言語政策が民衆の認識に大きな影響を与えてきたとし、そうした方針が国語以外の台湾本土の言語を方言として貶めただけではなく、多くの人々が台湾語を北京語を基礎とした国語にとっての「方言」の一つであるという誤った認識を生み出してきたと指摘した。彼らは台湾語と中国語は同じ言語系統に属するとしながらも、両者の間の差は相互コミュニケーションが不可能なほどに大きく、異なった「言語」であることを強調した。また、音韻の構造や語彙の精密さ、文法の論理性、ひいては感情豊かに日々の経験を表現できるといった点からしても、台湾語が中国語よりも優越した言語であることを主張した。彼らにとって、言語の没落とは一つのエスニシティ集団が頼みとして繋ぎとめようとする伝統文化が衰退していく予兆でもあり、伝統的な台湾文化はすでに国語を代表とする中国北方文化の重大な影響を受けて、徐々に衰退を始めていたのであった。彼らは台湾人にとっての国語とは外国語

のようなものであり、台湾本土の言語こそが台湾の独自性を表現できる主要なツールであると考えた。[11] こうした主張が展開される中で、台湾語の記述システムを確立することは当面の急務とされ、台湾独立にとっても重要な課題とされた。

中国南方の福佬人は、少なくとも数百年前には福佬語による民間劇を漢字で記載しており、漢字による福佬語の歴史はおそらくかなり長いといえる。台湾において漢字で諺や民謡、民間劇の劇本を漢字で書くといった歴史は、清朝統治時期にまで遡ることができる。日本の植民地統治時代において、台湾人は漢字で台湾語の流行歌を書くようになった。しかし、三割ほどの台湾語は既存の漢字を使って記述することはできず、叙述者は勝手に既存の漢字を借用したり、ときには新しい文字を自分で造り出したりもした。そのため、台湾語には統一された記述システムは存在せず、未だ記述されていない言葉も固定した記述方法を欠いてきた。

一九八〇年代後半以前には、台湾本土の言語を使って創作しようとする作家はほとんどいなかった。笠詩社の古参メンバーの林宗源は、戦後初めて漢字で台湾語の詩を書いた先駆者とされているが、一九六〇年代には早くも中国語の白話文の中に台湾語の語彙と文法を加えた詩を発表している。一九七〇年代から、林宗源はさらに「純粋な」台湾語による創作活動を始めた。また一九七六年四月には『台湾文芸』の若手メンバーであった向陽（林淇瀁）が、笠詩社において台湾語の詩をいくつか発表し、台湾語詩人の隊列に加わった。この二人の詩人の母語による創作のモチベーションはひどく単純なものだった。即ち、母語を使った方がより自然に自分の感情と思想を表現できるというものであった。

一九八〇年代前半、一部の党外雑誌は、日本植民地統治時代の台湾知識人たちが漢字で台湾語を記述しようと提唱したことや、また当時蔡培火が台湾語のローマ字表記を推進していたといった文章を紹介した。しかし、党外人士たちが国民党の国語政策を批判していたときと同様に、この文章も当時は多くの人々の注意を引くことはなかった。一九八四年九月、日本の台湾系歴史学者である許極燉は、『台湾文芸』において台湾語と台湾文学に関する文章を発表した。彼は植民地期における作家たちの台湾語による創作の試みに同情しつつ、現在の台湾人作家たちに「台湾語による台湾文学」の創作を呼び掛けた。また、それによって「台湾文学における台湾語」の記述を発展させることができると主張した。[12] 許極燉のこうした呼びかけは、人々に一九三〇年代初期における「郷土文学」と「台湾話文」（当時の台湾語の記述方法）の提唱の中で、郭秋生によって打ち出されたスローガンを思い起こさせた。即ちその試

みとは「台湾語による文学」を創造するだけではなく、同時に「文学における台湾語」を打ち立てようとしたものであった。一九八〇年代前半には、林宗源と向陽以外にも三人の本省人作家たち、宋沢莱（『台湾文芸』のメンバー）、黄勁連（笠詩社のメンバー、後の『台湾文芸』の総編集長）、林央敏（後の『台湾文芸』の編集委員の一員）らが台湾語による詩を創作し始めた。[13]

一九八七年一月、宋沢莱は雑誌『台湾新文化』において、台湾語による文章「台湾語の文字化の問題を論ず」を発表した。これは戦後初めて本省籍の作家が公に台湾語による創作を提唱したものであった。宋沢莱は、台湾人作家は台湾語による創作実験を行うべきだと呼びかけ、台湾語以外による言語創作活動は台湾本土文化の復興にとって何の貢献もないと主張した。彼は「郷土文学」が葉石濤や彭瑞金、陳芳明や李喬らが定義するところの「台湾文学」へと発展進化し、さらに「台湾文学」が台湾語文学へと発展していくことは必然的な流れであると強調した。[14] 一九八七年以降、反対運動家たちによる政府の単一言語政策への抗議の盛り上がりと、国民党政府の本土言語使用に対するコントロールが徐々に弛んでいくのにつれて、多くの作家たちが台湾語での創作を始め、『台湾文芸』『笠』『文学界』『新文化』『台湾新文化』『自立晩報』などに続々と作品を発表していった。

一九八九年から一九九五年の間に、少なくとも一二の本土言語の復興と台湾語記述システムの設計及び台湾語文学を提唱したサークル組織が成立していった。これらのサークル組織のメンバーはしばしば重複し、しかも相互間の交流は非常に密接であった。彼らはそれぞれ自前に定期刊行物を出版していたが、それらの多くは発行部数が抑えられ、流通には限りがあった。[15] 林宗源、黄勁連と林央敏などによって設立された「蕃薯詩社」もそうしたサークルの一つであった。「蕃薯詩社」は戦後初めて本土言語による創作を提唱した詩社であり、以下はその創作基準を列挙したものである。(1)台湾本土言語（台湾語、客家語、先住民母語を含む）を使用し、「正統な」台湾文学を創造すること。(2)台湾語による記述を提唱し、台湾語文学と詩歌の品質を引き上げ、台湾語の文字化と文学化を追求すること。(3)社会を表現し、悪逆に反抗し、被抑圧者と苦難に満ちた大衆の心の声を反映すること。(4)台湾民族精神と特色のある新台湾文学作品を創造すること。こうした基準は、一九八〇年代後半以降に台湾語文学を提唱した人々によって共有された理念であったとまとめることができるだろう。[16]

植民地時代における郷土文学と台湾話文の提唱と同様に、一九八〇年代末以降試みられた台湾語による記述システム設立の努力は、台湾語文学の提唱と切っても切り離せない関係にあった。一九八七年以降、台湾語によって創作

する作家が次第に増え始めたことによって、標準的な台湾語の文字を確立しようといった問題が比較的大きな関心を集めるようになった。一九八〇年代後半以降には、台湾語記述システムに関して各種異なった見解が各方面から打ち出された。技術的な問題、例えばどうやって台湾語に相応しい漢字を選ぶのかといったことがしばしば議論を巻き起こした。それぞれのグループが台湾語に関する自らの理念と提案を唱え、積極的に社会からの承認を求めた。第一に、ある人々は漢字を全般的に廃棄して、ピン音による台湾語の記述を主張した。彼らは西洋の宣教師たちが発明した台湾語のローマ字ピン音システムを改良して使用することを試みた。化学の教授であった林継雄は、積極的にこうした主張を繰り広げた代表的人物であった。第二に、漢字による台湾語記述を主張した人々もいた。これは最も現実的な方法であり、既存の漢字で表記できない台湾語の単語に関しては、漢字の部首などを使って新しい単語を創造するというものであった。日本の台湾系言語学者である鄭穂影は、こうした主張の提唱者であった。そして第三の方法は、漢字とピン音の字母を組み合わせるといった記述方法で、ローマ字によるピン音を用いることによって漢字では表記できない表現をカバーしようとした。これはハワイ大学の台湾系言語学者である鄭良偉によって提唱された考え方だった。一九八〇年代末以降は、この方法が台湾語記述の最も普遍的な方法として定着することとなった。第四の主張をしたのは洪惟仁で、韓国のハングル文字がローマ字のピン音字母に比べて形状構成や視覚上、より漢字とマッチすると考え、漢字と改良を加えたハングル文字を併用することが台湾語記述システムにとって最適だと主張した。

一九八〇年代末以降に企図された台湾語の記述システムと台湾語文学の試みは、日本植民地統治期に推進された台湾話文と郷土文学の努力と比較することで、より大きな進展が見られるものと考える。一九三〇年代初期における当時の提唱者たちは、未だに相当強い漢文化意識を持っていた。蔡培火のような例外を除いて、多くの者たちは漢字によって台湾語を記述することを支持し、台湾人と中国大陸及びその漢字文化との関連性を繋ぎとめようとしていた。当時、こうした主張を繰り広げた重要な指導者である郭秋生にとって、台湾話文は「……完全に漢字に依存しているものの、文言体系における方言といった地位からはすでに脱しており、しかしながら漢字体系においては、比較的方言色の鮮明な文字」[17]であった。しかしながら、如何にして「正確」、あるいは「より優れた」漢字を選択するのか、また甚だしきに至っては、如何にして新しい文字を創造することによって、漢字では表現できない言葉を表現するべきなのか。こうした解決困難な技術的問題が、植民地期における台湾語の創作実験を阻害してきた。両者を比較してみ

ると、台湾文化の独自性の構築に尽力した一九八〇年代末以降に台湾語による記述を提唱してきた者たちは、ほぼ例外なく台湾民族主義者であった。彼らの多くは漢字の表記に執着することなく、自由に台湾語の言葉をローマ字ピン音に置き換えていった。ローマ字ピン音によって台湾語の記述を主張した陳明仁は、笠詩人及び台湾ペンクラブ、そして蕃薯社のメンバーであり、かつて次のような発言をしている。

自らの家も文字も持たない民族は未来のない民族である。とりわけ、もし仮に、台湾が一個の独立した国家となることを欲するならば、台湾語文字化の必要性はより切実な問題である。

だが、それ（漢字）が持つ文化的な意味にもネガティブな封建的思想が隠されている。……もしもある人が自立も成熟もしていない思考で古い漢字の文献に触れれば、その意識は知らず知らずのうちに汚染されてしまう。これは著者にとって台湾建国運動上における大きな悩みであり、漸次漢字廃止を主張する原因である。[18]

台湾語のローマ字ピン音化は、台湾語の記述をさらに容易にしただけではなく、台湾語文学の発展を促進した。ピン音文字の採用は中国を中心とした従来の表意文字地域（韓国や日本、ベトナムなどの周辺国家を含む）において、地域アイデンティティが民族主義の方向へと邁進していく重大な変化でもあった。また近年のコンピュータ技術の進歩は、とりわけ漢字やローマ字ピン音による台湾語文書を処理するソフトウェアを使用する者たちにとって大きな助けとなり、台湾語記述の急速な発展を支える重要な要素ともなった。[19]

一九八〇年代末以降、ますます多くの作家たちが台湾語による創作を始め、作品における言語運用と台湾文学概念の間の関係性が議論の的となっていった。一部の福佬系の作家と文芸批評家たちは、言語の観点から新たに台湾文学を定義しようとした（例えば、先にあげた宋沢莱の見解など）。甚だしきに至っては、台湾語文学のみが台湾文学であると考える者たちまで現れ、客家系の作家や評論家たちは疎外感を感じることとなった。福佬人たちが主導する政治運動の急速な発展と台湾語復興運動の目覚ましい展開を受けて、多くの客家人たちは彼らと彼らの言語が再び周縁化されるのではないかと危惧した。一九八八年には、客家人たちは「客家語を還せ」運動を展開、客家語テレビの放送を要求した。しかし、結果として全国チャンネルを持つ放送局で毎週半時間の客家語番組（台湾電視公司の「郷親郷情」）の放送枠を勝ち取っただけに終わった。一九八九年、客家人の国民党及び福佬人に対する反感の高まりは国民党の「一党独裁」への抗議だけに止まらず、民進党の

「福佬ショービニズム」に対する批判にまで広がっていった。当時、「客家党」を組織する試みも現れたが、結局この試みは成功することはなかった。[20]

民族の歴史を書く

一九八〇年代に現れたこうした言語と文学の発展に関する異なった見解は、人々の台湾の歴史に対する異なった理解と深く関係していた。一九四七年の二・二八事件の終結から一九六〇年代にかけて、海外において反国民党を掲げる台湾人たちはすでに台湾史に関する自らの歴史叙述を構築しており、そうした歴史叙述を出版することによって、彼ら自身の政治主張を述べてきた。その中でも著名なものとして、蘇新の『憤怒する台湾』（一九四九年）、史明の『台湾人四百年史』（一九六二年）、及び王育徳の『台湾――苦悶するその歴史』（一九六四年）などがあげられる。彼らの政治的理念は大きく異なるものの、三人とも台湾の被統治経験や抑圧された立場から台湾史を描き出そうとしており、こうした手法によって従来の統治者や抑圧者たち（西洋や中国、日本の植民地政権、及び国民党政府を含む）の観点に取って代わろうとしたのだった。しかし一九八〇年代末以前の台湾において、彼らの著作は国民党政府によって発禁処分とされており、個人的に読むことができる程度であった。そのため、一九八〇年代以後の台湾史と政治運動の結合に関しては、その影響力も限られたものでしかなかった。

こうした「台湾史観」が公に浮上してきた主要な要因は、国内における重大な政治的変化、とりわけ美麗島事件がその引き金となっており、上述したような海外における台湾人の歴史論著に影響を受けたものではなかった。[21] 美麗島事件は一九八〇年代前半における政治運動の激化を引き起こし、また党外人士たちはこの頃から台湾史の新たな解釈を基礎とした台湾意識を提唱し始めたのだった。彼らは台湾民衆の集合的記憶の書き換えを図り、それによって民衆からの支持を勝ち取ろうとした。こうした台湾史観は、事実上党外人士たちによって提唱されたものであった。彼らは国民党政府による中国意識を批判し、また左派を自任する批判的知識人たちによる中国意識、とりわけ雑誌『夏潮論壇』における陳映真を代表とする知識人たちをその批判の対象としてきた。陳映真らは国民党政府による資本主義経済を批判し、「帝国主義勢力」（とりわけアメリカ）に対する過度の依存を非難してきたが、党外人士たちにとって、こうした左派系知識人たちは国民党同様に政治的に中国民族主義を堅持し、また中台の統一を求める立場にあったために、両者の間に大きな違いはないとされてきた。一九八三年の「台湾意識論戦」は、『夏潮論壇』の作者グルー

プと党外の急進派グループが集う『生根週刊』の作家たちの間で行われたが、双方は論戦相手の台湾史に関する「無知」や「歪曲」を嘲けることによって、自分たちの理解が全面的に正しく、客観的であると公言してきた。[22] 一般的に言って、国民党政府と左派の批判的知識人は両者とも台湾と中国大陸の間の類似性や歴史・文化における密接な関係性を強調してきた。しかし、党外人士たちは、台湾意識を強調することで台湾の独自性とその特殊な歴史的発展の道筋を浮かび上がらせたのであった。例えば、『生根週刊』がまさにそうであったように、この刊行物は「みんなで学ぶ台湾語」といったシリーズを掲載することで、読者に台湾語を広く認知させてきた。また、党外の穏健派リーダーであった康寧祥が主宰した雑誌『八十年代』においても、一九八三年以降は陸続と台湾史を紹介するシリーズが刊行されていった。この時期から、台湾史と政治的反対運動は次第に密接な関係性を持つようになっていった。

一九八〇年代前半、党外の政治論壇雑誌では、大量の紙数を割いて日本植民地統治史、とりわけ台湾人の抗日運動を掘り起こそうといった動きが現れていた。彼らはこうした歴史を討論することで、党外における反国民党運動が台湾人による長年の異民族統治への反抗の一部であることを強調しようとしたのであった。[23] その意図するところとはつまり、国民党と日本植民政府は同様に「外来政権」であるという点にあった。こうした文章は、台湾人の抗日闘争は完全な失敗に終わりはしたものの、我々は植民地統治を通じて台湾に対する特殊なアイデンティティを育て上げ、しかもそれは中国大陸に対するものとは違ったものであるといったことを強調するものであった。多くの党外雑誌の作者たちは、日本人が持ち込んだ現代的な政治統治と経済発展が漢人移民たちがもともと持っていた中国大陸の原郷（漳州、泉州、粤州）にそのルーツを持つ集団意識の境界を次第に曖昧なものにさせ、また地方に存在していた多くのコミュニティを台湾という土地に溶け込ませることによって、台湾人という共同体意識を次第に浮かび上がらせていったのだと考えた。彼らは賞賛するような口ぶりで日本がかつて推進した社会経済の近代化を議論し、中国意識に対する台湾意識の正当性を強調した。台湾意識を提唱した党外人士たちにとって、日本の植民地統治は事実貴重な資源であったのだ。[24] 前述の部分で取り上げたように、政治的な激変と党外運動の影響を受けた『笠』や『台湾文芸』の文学界人士たちも、当時こうした傾向を持っていた。

党外人士たちは中華人民共和国あるいは国民党が公言する「台湾は歴史上中国の一部であった」といった考え方は伝統的な「帝王史観」「天朝史観」であり、こうした歴史観は「中国ショービニズム」あるいは「漢人中心主義」[25]から生まれたものであるとして、従来の中国史観を全面的に

批判した。こうした政治的宣言や歴史観に反駁するために、党外の政治論壇雑誌は、特別に原住民の古い歴史を詳細に研究して、漢人移民による原住民の征服と搾取の過程を強調した。そのことは、被抑圧者である原住民を認識することによって、抑圧者である漢人との間に一線を画する意味もあった。こうした歴史叙述において、外来政権としての国民党政府はまさに中国ショービニズムと漢族中心主義の主要な推進者となっていったのであった。

一部の党外雑誌の作者たちは、さらに一歩踏み込む形で台湾人（福佬人と客家人）が純粋な漢人であるといった見解にも挑戦した。彼らは「平埔族」が漢人に同化して早期の漢人移民社会に溶け込んでいたことを指摘し、特に中国大陸からやって来た男性移民たちと平埔族女性たちとの通婚が台湾人の血縁を雑種で異質なものにしてきたことを主張した。これらの作者たちは、原住民の演じた役割を強調することによって「本土化」の角度から台湾の過去を理解するべきだとして、「台湾人の視点に立った台湾史」を書くことを提唱した。彼らは台湾史を記述する際に、中国ショービニズムと漢人中心主義の枠組みから抜け出すための唯一の方法が、台湾人民が台湾という土地に立脚点を置くことであると信じていた。高伊哥が「夏潮論壇」の作者グループを批判した文章は、こうした本土化の観点に立った典型的な陳述であるといえる。高伊哥は次のように強調している。

現代の台湾人にとって、福佬人であるか、客家人であるか、高山族であるか、あるいは大部分のすでに同化され、しかしわずかながら元来の様相を保持している平埔族であるかを問わず、数百年続いた種族闘争史から目を逸らさず、また故意に分裂を催すような行為は避けなければならない。さもなければ、相互の敵対関係を生み出しかねない。この三つの種族は、数百年来次々とやって来る外来の「ボス」たちの残酷な統治を受けて来た。こうした共通した運命の下で、彼らはこの土地の社会＝経済共同体にアイデンティティを抱き、共に歴史を創造しながら、子孫を増やしてきたのだ。

こうした漢文化や日本文化、あるいはマレー文化が混じり合った社会共同体は、外来の帝国主義による侵略の圧力の下で徐々に成長を続け、統治権力の転換によって、変動を続けてきた。これがまさに台湾の歴史的発展の客観的条件である。この土地にアイデンティティを抱き、台湾人を自任することこそが、主観的な台湾の歴史意識である。……

こうした「台湾人」の上に、何故「中華意識」の存在が必要なのか？　それでは、平埔族や高山族と漢人との間に生れた混血児の子孫たちは、いったいどこに

アイデンティティを求めればいいのか？　なぜこうした「上からの視線」で以って自分たちの同胞を圧迫する必要があるのか？[26]

つまり一九八〇年代中葉、党外人士たちは台湾の過去に対して、堅固で全体的な主張を発展させることで、中国史観の叙述に対抗しようとしたのだった。彼らにとって、台湾の歴史とは植民地化と反植民運動、抑圧と抵抗の歴史であり、また台湾人民は長年植民地と抑圧の下で苦しんできた被害者であり、彼らが持つ台湾意識とは一種の被抑圧と抵抗意識であって、民衆の反国民党闘争を鼓舞する核心的な動力でもあった。こうした歴史記述は常に台湾人による抗日運動と早期の原住民の歴史を喧伝する結果となった。

美麗島事件が発生して後の数年間、党外人士たちは改めて台湾人の苦難と抵抗といった集合的記憶を描き直すことで、以後の政治的反対運動の基調としてきた。一九八〇年代前半に彼らが台湾史を書き直そうとしたことは、それ以降の台湾民族主義の急速な展開にとって重要な意味を持つこととなった。先に述べたように、党外人士たちによる独特の歴史観は、明らかに『笠』や『台湾文芸』グループの作家たちに大きな影響を与えてきた。しかも、美麗島事件後の数年間、『笠』と『台湾文芸』に関わった二つの文学人士たちもまた、こうした党外人士たちと密接な関係を築いていった。党外雑誌の作者たちが台湾の歴史を本土化の一環として認識しようと力を注いできたのと同様に、『笠』と『台湾文芸』の作家や文芸評論家たちもまた、台湾文学の本土化を追求してきたのだった。一九八三年を起点として、李筱峰、李永熾、鄭欽仁、陳芳明、張炎憲、楊碧川など、多くの専門あるいはアマチュアの歴史学者たちが、陸続と『台湾文芸』に参加して「本社同人」、あるいは編集委員へと就任していった。また、同年一九八三年から一九八五年初めにかけて、この文学雑誌には「台湾史料復習」「台湾歴史人物」「台湾人物回顧」「台湾歴史論叢」などの専門欄が設けられ、台湾の歴史人物と事件、とりわけ日本植民地時代について多くが議論された。上述した歴史家たち、とりわけ陳芳明と張炎憲は、その後台湾史観の主要な提唱者となり、中でも陳芳明は台湾意識と台湾文学の本土化の熱烈な提唱者となっていったのだった。

一九八〇年代前半の党外人士たちによる積極的な台湾意識の提唱に加え、一九八六年以降の政治的な自由化、それに台湾民族主義の急速な発展と与党国民党による台湾化の一連の動きは、台湾史の学術研究及びアカデミズムにおける台湾研究の発展に大きく寄与することとなった。人文社会学の研究者たちは、日本植民地時代と戦後台湾に興味を抱き、平埔族の歴史と文化にも大きな関心を向けた。しかも、多くの若い大学院生たちが台湾史や台湾研究に身を投じ始めたのだった。こうした動きは、明らかに集合的アイ

デンティティへの普遍的渇望への追求を反映したものであったといえる。

一九八〇年代中期以降、台湾史研究は台湾独立を支持する歴史学者の影響を深く受けるようになっていった。とりわけ、『台湾文芸』の作家たちと密接な関係にあった歴史学者たちの影響力は際立っていた。一九八三年九月、鄭欽仁は『台湾文芸』において「台湾史研究と歴史意識の検討」を発表、当時明確に「台湾史観」を解釈したものとしては先駆的な内容であった。この文章は台湾史研究がすでに新たな段階へと移行していたことを意味しており、また一九八〇年代前半における党外人士たちの行った提唱が、歴史学者たちに深い影響を与えていたことを証明するものでもあった。鄭欽仁は、台湾史研究は中国史の影響を受けるべきではないと考え、世界史的な観点から台湾を見ることによってのみ、台湾は過去と未来において演じるべき役割を見いだすことができると考えた。そうすることによって、台湾の自立生存の道を模索して、周辺権力のいざこざから逃れようとしたのだった。彼は統治政権ごとに時代区分を行う「政治史観」はすでに時代遅れだとして、台湾の歴史家たちは歴史の主体性について考えるべきだと主張した。「我々・人民」こそが歴史の主役であり、歴史もこうした「我々」によって書かれるべきだとしたのだ。鄭欽仁は、戦後台湾における「中元文化本位主義」を間違った統治理念の一部であるとして、そのことがすでに多くの不幸な事件を生み出してきたと批判し、歴史教育においても国民の合理的観念を育て上げることができないと主張した。また、台湾の歴史教育は過度に中央集権的で、従来の中国統一の理念は地方を蔑ろにしており、その結果政治不安を生み出してきたと批判した。彼は「漢族ショービニズム」を中元文化本位主義と中央集権観念に根差すものであると考えたのであった。鄭欽仁は、さらに一歩踏み込む形で、歴史的に見て中国大陸の「大陸型文化」は内向的であるが、台湾の「海洋型文化」は開放的で、両者の間には明らかな差異があると強調した。台湾は先天的な海洋国家の条件を備えており、その国家体制は自由で、開放と進取の気風を備えているものの、現在の台湾は精神的、意識的にそれを否定されているとした。とりわけ、彼はここ数十年来の地方意識の高まりを自然なものだとした上で、それを「地方意識の肯定は現政権の安定に有利である」、「必要以上に不安がる必要はない」と自らの主張を展開した。一九八〇年代前半以降、台湾独立を支持する歴史学者たちが提唱した台湾史観の多くは、鄭欽仁のこうした論点を越えるものではなかった。「台湾の主体的歴史観の建設」や「台湾の歴史的主体性の再建」といったスローガンは、その後彼らがしばしば提起する核心的理念となっていった。一九九五年二月には、ついに「台湾歴史学会」が成立、その初

代会長には李永熾が就任した。

一九八〇年代中期以降、台湾人の集合的記憶を描き直そうとする各種運動の中で、最も人々の注意を引いたものは、一九四七年の二・二八事件の歴史的真相の掘り起こし作業と平埔族に関する歴史研究であった。まず最初に、一九八〇年代中期以後に反対運動家たちと歴史学者たちが二・二八事件の真相の究明を始めたが、それらは基本的に一九八〇年代前半における党外人士たちの成果を引き継いだものであった。即ちそれは台湾の過去を植民地化と反植民地、受難と抵抗の歴史の中に描き出そうとするものであった。党外の政治論壇雑誌は、これまでも事件の真相を掘り起こそうと努力をしてきたが、一九八七年二月に「二二八平和記念日」が成立して歴史的なタブーが破られ、ようやく公の話題として取り上げられるようになった。かつて『台湾文芸』の社長を務めた陳永興は、『笠』や『台湾文芸』、『文学界』や『台湾新文化』、また台湾ペンクラブなどの文学・文化団体を含む民進党の指導者や支持者たちを大量に集めて集会やデモを行い、国民党政府に事件の真相を公表するように要求して、国民党の軍隊の虐殺によって亡くなった犠牲者たちの名誉回復を訴えた。党外人士たちは、一九八〇年代前半にはすでに台湾史に対する全面的な叙述を築き上げており、戦後の国民党統治下の台湾をそうした叙述によって解釈することで、二・二八事件の真相を追求し、それを台湾人の「受難と抵抗」の象徴と論述として発展させていったのだった。

一九八〇年代中期以前、平埔族の歴史に関心を抱く人はごくわずかで、戦後における人類学者たちの台湾原住民に対する関心も、主に山地原住民研究に偏っていた。一九八〇年代中期以後になって、平埔族の歴史はようやく広範な関心を呼び起こし始めた。その後、平埔族の歴史と文化はアカデミズムや民間のアマチュア歴史学者、民俗学者や人類学者たちの間で流行の研究テーマとなった。このことはまた、台湾のエスニック・グループに関する意識にも大きな影響を与えた。多くの福佬人と客家人は自分たちのルーツ探しを始め、そこに平埔族の血統を発見すれば、自らを平埔族と名乗るようになった。平埔族とされた多くの部落では、伝統的な祭祀儀礼や祝典が取り行われたが、その中には新たに造り出されたもの、あるいは新たに創造された儀式が多く含まれていた。また、こうした中で多くの平埔族の指導者たちは、自分たちの部落史の執筆に取りかかった。また同時に、彼らは政府に対して自分たちにも山地原住民と同様の権利、例えば特定の居留地を保有することなどを要求した。一九九一年七月、平埔族の一支族であるケタガラン族の「十三行文化遺産」を守る運動にはとりわけ「脱中国化」と多文化主義な傾向、また「下から上への歴史」といった理念が強く打ち出されていた。これらはまさ

しく台湾史観の典型的な縮図であり、また台湾史観の影響が次第に増大していることを象徴していた。一九八〇年代末以降、社会一般が「四大エスニック・グループ」、運命共同体、エスニック・グループ間の平等や多文化主義理念といった考え方を受け入れていくに従って、平埔族の歴史が新しく発見され、またそこに新たな意義が与えられていった。彼らの存在は中国民族主義に対する挑戦だけにとどまらず、中国の視点から台湾史を解釈することに対するある種の異議となり、また新たな台湾人アイデンティティ形成の助けにもなった。多くの人々が自らを平埔族と名乗るようになり、こうした現象は歴史意識の本土化を促進し、人々に台湾が中国とは異なった運命共同体であることを認識させていった。失われた部落の歴史を掘り起こすことは、失われたそれらを認識することによって、人々に台湾人が如何に多民族的で多文化的な国民であるかを想像させてきた。即ち、「我々は皆台湾人である」（一九九〇年代から国民党と民進党は共にしばしばこうしたスローガンを使ってきた）。彼らは互いに異なったエスニック・グループに属しているものの、一つの国民の枠組みの下に団結することができるのだ。

結　論

一九七〇年代から、若い現実回帰の世代は「脱亡命化」の政治と文化を追求してきた。一九八〇年代から一九九〇年代に至って、台湾民族主義者たちは「脱植民地化」を企図し、主体性を持った台湾の政治と文化を建設することを渇望してきた。そうしてすでに三〇年の月日が流れた。本省人を中心とした政治運動は一九七〇年代から始まって、党外時期を経験して誕生した民進党が成立した後も三〇年近く、国民党統治への挑戦を続けてきた。二〇〇〇年、ようやく陳水扁と呂秀蓮が総統と副総統に選出され、半世紀の間政権を掌握し続けてきた国民党を野党へと突き落としたのだった。それはまた、戦後台湾で起こった初の政権交代であった。

陳、呂の二人による二期八年の民進党の執政期間を経て、二〇〇八年には馬英九と蕭万長がそれぞれ総統と副総統に選出され、国民党は再び政権の座に返り咲いた。その後、国民党は民進党が執政期間中に採った一連の政策、とりわけ文化教育政策を転換させようとしてきた。二〇〇八年夏、国民党政府のこうしたやり方は台湾民族主義を支持する「本土派」の人々の抗議を引き起こしてきた。彼らは国民党の執政者たちが再び踵を返して、教育の「中国化」

と「脱台湾化」を図っていると批判したのだった。こうした批判や抗議の場面は、一九八〇年から一九九〇年代における台湾の文化的主体性理念の高まりや台湾の民族主義者たちが国民党統治に挑戦していた状況と酷似しており、さながら台湾が再び過去に舞い戻ったかのような錯覚を起こさせた。こうした現象は台湾の民族主義が一九八〇年代から大きな影響を持っていたことを示すものであると同時に、台湾社会がナショナル・アイデンティティや相関する文化的な趨勢が明らかな分岐点を迎えたことを反映しているのだともいえる。

しかしながら、ここ最近の傾向と一九八〇年、一九九〇年代のそれとの間で明らかに違った点として、台湾海峡を挟んだ両岸の交流がますます進み、中華人民共和国という要素が台湾内部における政治と文化をめぐる対立に与える影響が、昔のそれと比べて明らかに多く、より直接的になってきたということである。

台湾の文化的主体性に関心を抱く台湾民族主義者たちにとって、馬英九率いる国民党政府の文化政策は中華人民共和国と対立するものではなく、むしろ両者の声は重なり合っているように見える。そのため、「台湾社」の社長である呉樹民のような強烈な批判の声もあがっている。「国民党の教育政策は台湾の歴史を滅ぼし、台湾文学を滅ぼし、台湾の言語を滅ぼすものである。それは国民党が台湾を滅亡させる確かな証拠であり、中国への併合こそが彼らの本質であるのだ」[27]。中国という要素が台湾社会へ与える影響の強さは、我々に台湾民族主義の文化政治をより深く理解させるものであるといえる。中国の影響力以外にも、国際関係上のパワーバランスなども現在の台湾の状況をより複雑なものにしている。東アジアに浮かぶこの島は依然として荒れ狂う歴史の苦海の只中を航海しており、未だどこに碇を下ろし、碇泊するべきかを知らずにいるのだ。

Acknowledgement: This article was made possible by a Fellowship of the International Consortium for Research in the Humanities "Fate, Freedom and Prognostication. Strategies of Coping with the Future in East Asia and Europe" (supported by the Federal Ministry of Education and Research) at the University of Erlangen-Nuremberg, Germany.

注

〈1〉 筆者の『回帰現実――台湾一九七〇年代的戦後世代與文化政治変遷』（第二版、台北：中央研究院社会学研究所、二〇一〇年）を参照。

〈2〉 本文における以下の議論は、大部分を筆者の『重構台湾――当代民族主義的文化政治』（台北：聯経出版、二〇一二年）に拠っている。

〈3〉『台湾文芸』九一期、一九八四年、三二頁。
〈4〉詹宏志「両種文学心霊――評両篇聯合報小説奨得奨作品」『書評書目』九三期、一九八一年、二三－二四頁。
〈5〉高天生「歴史悲運的頑抗――随想台湾文学的前途及展望」『台湾文芸』七二期、一九八一年、二九七－二九八頁。
〈6〉彭瑞金「台湾文学應以本土化為首要課題」『文学界』二期、一九八二年、二－三頁。
〈7〉宋冬陽「現段階台湾文学本土化的問題」『台湾文芸』八六期、一九八四年、一〇－四〇頁。
〈8〉李喬「台湾文学正解」『台湾文芸』八三期、一九八三年、七頁。
〈9〉『台湾文芸』一〇五期、一九八七年、六頁。
〈10〉例えば、呂興晶「台湾文学資料的蒐集整理與翻訳」『文学台湾』八期、一九九三年、二一－三五頁。葉石濤はこれに「平埔九族」を入れるべきだと考え、「台湾は目下この五つの種族によって構成されており」、「台湾文学はこの五つの種族によって共同で創造・構築されるべきだ」と主張した。葉石濤「開拓多種族風貌的台湾文学」『文学台湾』九期、一九九四年、一〇－一四頁。
〈11〉例えば、林錦賢「為斯土斯民个語言故文化講一句話――兼論陳瑞玉先生个両篇文章」（『台湾文芸』一一三期、一九八八年、六一－八二頁）、鄭良偉『演変中的台湾社会語文』（台北：自立晩報、一九九〇年）、洪惟仁『台湾言語危機』（台北：前衛出版、一九九二年）。
〈12〉許極燉「台湾文学需要充実的維生素――泛談台語與台湾文学的関係」『台湾文芸』九〇期、一九八四年、二九－四六頁。
〈13〉林央敏『台湾文学運動史論』台北：前衛出版、一九九六年、二三頁。
〈14〉宋沢莱「談台語文字化問題」『台湾新文化』五期、一九八七年、三八－四一頁。
〈15〉林央敏、前掲『台湾文学運動史論』九六頁。
〈16〉同右、九八頁。
〈17〉廖毓文「台湾文字改革運動史略」李南衡編『日拠下台湾新文学』明集5：文献資料選集、台北：明潭出版社、一九七九年、四九一頁（初出一九五四・一九五五年）。
〈18〉陳明仁「「台湾語文復興運動」引用補充資料」『台湾文芸』一三三期、一九九二年、一三八－一三九頁。
〈19〉教育部は各種の台湾語ピン音をまとめて、二〇〇六年一〇月に「台湾閩南語ローマ字ピン音方案」を、二〇〇七年五月には「台湾閩南語推薦用語」を続けて公表した。そして「台湾閩南語常用辞典」のインターネット版を世に送り出し、それを民衆に提供した。これらは台湾語の文字化とその記述を統一させ、その利便性を高めるものであった。
〈20〉しかし、近年では続々と客家人の政党が誕生している。二〇一三年四月までに、「人民団体法」の規定によって内政部に記録されている政党は以下のものがある（括弧内は政党の成立時期）。客家党（二〇〇六年一〇月）、台湾新客家党（二〇〇七年二月）、中華客家党（二〇一〇年二

月）、世界客属党（二〇一一年三月）。

〈21〉 張炎憲「台湾史研究的新精神」『台湾史料研究』一期、一九九三年、八四頁。

〈22〉 例えば、宋冬陽、前掲「現段階台湾文学本土化的問題」（一〇－四〇頁）、戴国輝「研究台湾史経験談」（『夏潮論壇』一二期、一九八四年、二九－三五頁）、呉徳山「走出「台湾意識」的陰影――宋冬陽台湾意識文学論底批判」（『夏潮論壇』一二期、一九八四年、三六－五七頁）、秦琦「神話與歴史、現在與将来――評『夏潮論壇』対党外的批判」（施敏輝（陳芳明）編『台湾意識論戦選集』台北：前衛出版、一九八八年、一－七頁に収録、初出一九八四年）。

〈23〉 例えば、顔尹謨「日拠時代與国民党統治下反対運動模式」（『政治家』一六期、一九八四年）六〇－六四頁、施敏輝「『台湾意識論戦選集』序」（施敏輝編『台湾意識論戦選集』台北：前衛出版、一九八八年、一－七頁に収録、初出一九八五年）。

〈24〉 例えば、施敏輝が編集した前掲『台湾意識論戦選集』に収録されている陳樹鴻、高伊哥、林濁水、施敏輝などの文章がある。

〈25〉 例えば、高伊哥「台湾歴史意識問題」（施敏輝編、前掲『台湾意識論戦選集』一六七頁に収録）、施敏輝、前掲「『台湾意識論戦選集』序」四頁。

〈26〉 高伊哥、前掲「台湾歴史意識問題」一六七－一六八頁。

〈27〉 『自由時報』二〇〇九年一〇月一六日、「自由広場」欄。